



MUSEOLOGY

実践女子大学
博物館学課程

no. 42

MUSEOLOGY

CONTENTS

展示会の作り方	
『生誕一五〇年記念 板谷波山の陶芸』展を例に	1
卒業生による活動報告	
板谷波山記念館	4
2022年度博物館実習先一覧	7
博物館実習報告	
出光美術館	8
茨城県陶芸美術館	9
横浜市歴史博物館	10
埼玉県立近代美術館	11
千葉市美術館	12
実践女子大学香雪記念資料館	13
梱包実習報告	15
博物館学課程の受講について	17

板谷波山記念館

2018年度資格取得

橋本 空樹

はじめに

学芸員を目指し、学部生の頃は美学美術史学科で日本近世美術史を専攻、そのまま大学院へ進学しました。当時は伊藤若冲の水墨画について研究をし、就職先でも近世絵画をずっと研究し続けられると思っていました。

現在私は、近代陶芸家板谷波山を顕彰する施設、板谷波山記念館に勤め、学芸員という夢は実現しましたが、やきものは全くの専門外、更に記念館としては初めて学芸員を採用したということで、先輩がいないなか勤めることになり、1年目に企画展、2年目には波山の生誕150年の大規模展覧会を開催することになりました。

異色な経歴ではありますが、この2年間勤めて感じたことなどを本稿でお伝えできたらと思います。

板谷波山記念館

筑波山の二峰が美しく見える茨城県筑西市。JR水戸線「下館」駅を下車して10分程歩いた場所に板谷波山記念館があります。江戸時代は城下町として大変栄えた場所で、与謝蕪村が逗留した地でもありました。

1963年、波山の遺言の元、生家を含む土地を譲



板谷波山記念館外観

り受け財団法人波山先生記念会が設立。1980年に板谷波山記念館が開館しました。現在、市の指定管理者として公益財団法人波山先生記念会が担っており、私はその財団職員です。

施設内には波山の生家（茨城県指定文化史跡）と展示室、工房を再現した作業棟なるものがあります。

波山が生まれたのは下館ですが、活動場所の中心は東京の田端文士村にありました。しかし、現在その一帯は区画整備のため姿を消しています。波山のご子息、そして財団の設立メンバーにより邸宅にあった資料、道具、窯をすべて記念館に移築させました。平成に入ってから、窯跡の調査により大量の陶片が発掘され、それらも当館で保管しています。

また、財団の活動として、波山の遺言に奨学金制度を設立することを希望していたので、現在でも地元の高校生を推薦し「波山奨学生」として奨学金の授与をしています。

学芸員の仕事

①収蔵庫整理

記念館は財団メンバーにより長らく守られてきた場所でしたが、公益財団法人になるのをきっかけに、はじめて正式に学芸員を雇用することになりました。

波山研究の第一人者である学習院大学 荒川正明先生をはじめ、学習院大学の学生や、地元で下館の歴史について研究活動をしている非営利団体の方たちが記念館の収蔵品を整理していました。しかし、継続的に行なわれず、整理の様式もバラバラ。新たに寄贈品が入っても記録がないこともあ



板谷波山生家（茨城県指定文化史跡）

卒業生による活動報告

りました。そのため、もう一度収蔵品を洗い出すことから始め、軸となる整理方法を作っていく必要がありました。ここで私が最も意識したことは「私がいなくても誰でもわかりやすいようにする」ということです。

まず、作品の箱には写真つきのタグをつくることからはじめました。一番骨が折れるのは陶片の整理です。ほとんどは釉がかかっているため、ある程度の強度は保証されています。当時はすべて薄葉紙で梱包されていましたが、中身が見えないような写真を貼っても紛失することがあり意味がありませんでした。本来はコンテナに一つ一つ入れたいところですが、倉庫の限界がありますので、作品ごと又は同種類で保存袋に入れて、名称と陶片の数（今後割れて増えることがあっても、無くなることはないように）を記入しています。これだけで今後の検索のストレスは軽減されます。そして、一つ一つデータ入力するまでが収蔵庫整理です。

学芸員が常駐することは基本的な収集、保管を行う人が毎日いることであり、「作品の門番」です。個々の作品の性質をしっかりと把握しているからこそ、安全に他館へ貸与することができます。これは他の職員と取って代れるものではありません。ただ、現状では私しか学芸員がいないため書簡類など細かい資料については、まだまだ終わりが見えておりませんが…。

②展覧会

やはり、学芸員の仕事の醍醐味は展覧会ではないでしょうか。記念館では常設スペースがないため、年4回展示替えを行います。毎年春と秋に企画展、それ以外は所蔵品展にテーマをつけて展示をしています。

特に所蔵品展示の場合、自分の館は「どのようなカラーを出していきたいか」というのを念頭に展示を考えています。当館のようなところは、一人の人物に集中して展示ができますが、波山を顕彰するだけの施設で良いのかということです。波山に関する資料は山ほどありますが、やはりそればかり展示をしては資料館のような場所になってしまいます。波山は陶芸家であり、なんといても作品の美しさを見せていく美術館的な性格をもちあわせる必要があると先生方からご指導頂戴いただきました。そのため、なるべく作品を見せるよ

うな展示を心がけています。

しかし、たくさんの完全作品は持っていないため、同じ作品が連続で展示されてしまうこともしばしばあります。これを如何にして面白く魅せるか。同じ作品でも新たな視点を来館者に提供するのが、学芸員の腕の見せどころではないかと日々悪戦苦闘しております。

「生誕150年記念

板谷波山の陶芸－麗しき作品と生涯」

学芸員になって初めて担当した大きな展覧会は、2022年の「生誕150年記念 板谷波山の陶芸－麗しき作品と生涯」でした。その前に自館でも企画展を開催していましたが、150年展は全国巡回展示ということもあり、他館を巻き込んで開催する大規模展です。当時はまだコロナの影響で先が見えないなか企画が立ち上がり、無事開催されることを信じて日々準備していました。

開幕の封を切ったのは、波山の生まれ故郷筑西市で、2ヶ月間開催しました。市としては初の試みで筑西市にある美術館・記念館3館との連携開催をしました。それぞれ性格や内容が違う3館を巡ることで波山のことを、筑西市のことを知ってもらうきっかけになりました。

なかでも記念館が一番歴史が長く、地元の方に親しまれている館であるため、波山が故郷に残した作品たちを展示しました。このことは知られざる波山の一面として多くの方の印象に残ったようです。

地元の方の家々に大切に保管されている、長寿のお祝いに配った「鳩杖」270本のうち26本、そして戦没者遺族へ贈られた観音像268体のうち64体をお借りして展示をしました。

今回の展示のもう一つの目的は、所蔵されている方がどのくらい筑西市に在住しているのか。また引き継ぐ方が近くにいらっしゃるのかということでした。約半年の調査をかけてわかったことは、殆どがご高齢夫婦の二人暮らし、子どもや孫にあたる人は近くにいないことがわかりました。願わくは、波山が個人へ向けた作品は代々受け継がれてほしいものです。しかし、今後記念館での受け入れや、売却となっても今後受け入れ先のルートがわかるように所蔵者への手助けができればと思っています。

展覧会是这样いった調査などの下準備が行われ

卒業生による活動報告

た上で展示されます。特に個人所蔵の場合は今後の作品の行方などを注視する必要があります。そういったときに近隣の美術館・博物館は対応できるように準備しておかなければいけないと思います。

③学芸業務以外の仕事

残念なことに、小さな財団には常駐している事務職員は1人。私は学芸員という肩書ですが、同じように事務作業をしています。

入館者、グッズ、アンケートの集計、HPやSNSの更新、団体の申込みやメディア関係の対応、修繕工事の立ち会い、地元の小学生の受け入れ等をし、併せて館内を見回っていると突然来館者に声を掛けられることもあって、あっという間に時間が過ぎていきます。

大きな施設で、人員が豊富な館でない限り、こういったことは業務内容に含み済みで行う仕事かもしれません。これだけで1日が潰れてしまうのはよくあることで、自分のやりたい研究や展覧会の準備はその合間を縫ってやっています。はじめはこの現実に耐えられないと思っていましたが、月日を重ねていくにつれ効率よく仕事をこなすことができるようになります。やはり自分のやりたいことをするには多少の労も必要と思って業務を

こなしています。また、こういったことは決して無駄ではなく、自分が勤務していないときにどんな来館者がきているのか、情報を取り入れることで展覧会企画が立てやすくなるのではないかと思います。

まとめ

私の2年間は本稿で書ききれないほど、多くのことを学び、濃密な時間を過ごしてきました。遡れば、学生時代にどうぞ美術に夢中になってください。と言わんばかりの環境にいたことは、私に非常に大きな影響を与えてくれました。

学芸員は守られてきた作品を大事にしていくだけでなく、新たな価値を生み出し、発信していくことも必要だと思います。既に名の知れている作品、そして名もなき作品にも無限に魅力と可能性が詰まっています。その魅力を来館者に伝え、それが生涯心に残るきっかけになることもあります。

それを見出すには、多くの作品を見る「目」と、多くの感動を享受する「心」が基本だと思います。文学や美術に触れている皆さんにはそういった“土壌”が今育まれている最中です。どうぞ、たくさん本、たくさん作品を見て、たくさん感動をしてください。



「生誕150年 板谷波山の陶芸一麗しき作品と生涯」記念館展示風景

2022年度 博物館実習先一覧

2022年度は、下記の博物館・美術館に実習を依頼しました。
関係諸機関およびご担当いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

(都道府県別・五十音順)

都道府県	館名	実習生
茨城	茨城県陶芸美術館	1名
	茨城県近代美術館	1名
神奈川	横浜市歴史博物館	1名
埼玉	川越市立美術館	1名
	埼玉県立近代美術館	2名
	埼玉県立歴史と民俗の博物館	1名
千葉	千葉市美術館	1名
東京	板橋区立美術館	1名
	出光美術館	2名
	古代オリエント博物館	1名
	渋谷区立松濤美術館	1名
	東京富士美術館	1名
	練馬区立美術館	1名
	町田市立国際版画美術館	1名
学内	香雪記念資料館	17名
	実習生総数	33名

出光美術館

美学美術史学科 4年

第1日目 9月12日(月)

10時に本館である丸の内の出光美術館に集合。午前は、はじめにオリエンテーションがあり、実習を担当して下さる学芸員の方2名と実習生8名で自己紹介を行ってから、初日を含め、5日間の予定についての説明を受けた。次に学芸員の方の1回目の講義があり、学芸員は借用作品に頼らない展覧会作りのために、独自の企画性、明確な意図性、作品の新たな解釈を行っていく必要があり、そのためには継続的な作品の調査・研究が不可欠であることを学んだ。

午後ははじめに、学芸員の方から「展覧会の担当者がどのような意図を持って作品を選んだのかを考えながら鑑賞することも大切」という教えを受けながら、9月3日から開催されている「仙厓のすべて」展を見学した。その日はたまたま、展示されている作品の撮影もあったため、作品見学を行なった後、作品撮影の見学も行なった。次に2人目の学芸員の方からの講義を受けた。何年かに1回のサイクルで過去に行なった展覧会を再び行なうことから、切り口・趣向・主役となる作品を変えることで試行錯誤を繰り返していること、書や屏風、工芸など作品の形態によって作品の見せ方を変え、作品の魅力が伝わる展示を行なうこと、心地良い鑑賞空間を作るために展示の構成や流れ、導線を考え、何度も図面を考えることの重要性を学んだ。最後に、2日目からの注意事項を伺い、1日目の実習は終了した。

第2日目 9月13日(火)

10時に三鷹にある分室の中近東文化センターに集合。午前中は地下3階から地上1階まである収蔵庫の見学を行なった。収蔵庫に入ってみると様々な工夫をして作品を収蔵していることがわかった。棚の上段にサイズが小さい作品、下段に大きな作品という順に収蔵されていた。これは、学芸員が作品を棚から取る際に、上段から大きな作品を取り出した時に起こりうる落下事故を防ぐためである。他の特徴として、棚の各段に扉がついていたこと、棚同士で天井部分がかぎによって繋がっていた。これらは地震が発生した際に、揺れで作品が落下、または棚自体が倒れてしまうことを防ぐための対策であった。さらに、以前は書画類の作品は地下3階に所蔵されていたが、東日本大震災を機に災害対策として地下1階に移動したというお話を知ることができた。日本は地震だけでなく、近年は大雨による水害の被害も多く発生しており、災害から作品を守る対策の重要性を学んだ。

午後ははじめに、平常展の作品撤去作業の見学を行なった。次に卷子と掛軸の取り扱いの確認を地上1階の収蔵庫にて行なった。学芸員の方たちに基本的な動作の見本を最初に実習生に見せてくださり、その後順番に実習生が動作を確認した。その中で、掛軸の巻緒の止め方を2種類教えて頂いた。さらに、作品に負荷をかけないように指先のみで作品を取り扱っている人がいるが、落下防止のため、指先だけではなく手のひら全体で作品を取り扱うようにとの助言を受けた。最後に、3日目からの課題発表の準備についての説明を受け、2日目の実習は終了した。

第3日目 9月14日(水)

10時に中近東文化センターに集合。この日から最終日の課題発表のための準備を始めた。まず、班のメンバーと初日に配布さ

れた模造作品リストを見ながら、各自が気になっている作品を実際に見て、展示の方向性を決定した。さらに実際に使用する展示ケースの大きさを測り、どのくらい大きさの作品が展示可能かを確認した。模造作品は可動式本棚の上段にあったため、脚立に上り作品を取る人、下で作品を受け取る人、リストを見て作品番号を読み上げる人と分担しながら作品を取り出した。

午前中の残りの時間と午後は、地上1階の収蔵庫にて作品調査を行なった。班のメンバーは4人だったため2人ずつに分かれて作品の確認を行なった。卷子を広げ、巻き戻す作業を交代で行い、効率的に1つでも多くの作品を広げることができるよう工夫をして作業を行なっていった。

第4日目 9月15日(木)

午前10時に中近東文化センターに集合。まず、前日の実習で決めることができなかった作品を決定した。次に、展示ケースの大きさを考えながら展示内容に合う作品の場面選択と展示の順番決めを行なった。そして、展示の順番を決める際、「鑑賞する側に伝えたいことは何か」を考えながら話し合いを進めていった。しかし、話し合いの途中で当初選んでいた作品が展示内容に合わないことがわかり、代わりとなる作品探しを行なった。この一連の流れから、ただ作品を選定するのではなく、方向性・表現・サイズ感と多くのことを選定の際に考えていかなければいけないことを実感した。最後に誰がどの作品を担当するかを決め、キャプション制作と最終日の作品説明のために書庫にて文献を探し、キャプションに載せる情報をメンバーと一致させ、4日目の実習を終えた。

第5日目 9月16日(金)

午前10時に中近東文化センターに集合。まず、班のメンバー同士で担当した各作品の解説をお互いに読み合せて文章の確認と修正を行なった。次に、制作したキャプション・解説を書いた紙を印刷し、パネル制作の作業を行なった。1面はシール面、もう1面は何もない面となっているパネルを使用した。はじめに、全ての保護用紙を外してからキャプション・解説の紙をシール面に貼るとズレたりシワになる可能性があるため、印刷した紙より少し大きめにパネルを切り、シール面に貼られている保護用紙にカッターで切り込みを入れ、真ん中部分の保護用紙をめくってシール面を出し、印刷したキャプション・解説の紙を貼った。次に、残っている保護用紙を順番に剥がし、紙とシール面の間に空気が入らないように手で押さえながら貼っていった。最後に、紙の大きさに合わせて余った部分を切り落としていくことでパネルを完成させた。実際にパネルを制作して、キャプション・解説が書かれたパネルは、作品の次に鑑賞者が目にするため、形が歪なパネルは鑑賞者に良くない印象を与える可能性があると思った。

午後は展示作業と課題発表を行なった。展示作業では、けさんや巻軸、巻緒を留めるための画鋲を使用しながら1人で1つの展示ケースを使用して作品の展示を行なった。実際に多くの人が作品を鑑賞しているのかを想定しながら、作品やキャプション・解説を見やすい位置に置いた。課題発表では、前日に書庫で探した文献を参考にしながら、自分でディスクリプションを行なって作った解説をどこのことを話しているのか手で示しながら説明した。各班の課題発表が終了した後、発表を見学した学芸員の方々から講評を頂いた。作品の展示を始める前の展示ケース内の掃除や他の人たちの作品や解説・キャプションの位置、時間がない中での作業で作品の取り扱いが雑になっていたことを学芸員の方々から指摘をされて気が付いた。限られた時間の中で作品を展示することのみに意識が向いてしまったが、怠りでも常に作品は丁寧に扱わなければならないという意識を持つことの大切さを学ぶことができた。作品の撤収作業が終わったのち、実習を担当して下さった学芸員の方々からお言葉を頂き、最後の実習が終了した。

博物館実習報告

茨城県陶芸美術館

美学美術史学科 4年

第1日目 7月18日(月)

8時50分に警備員室前で他の実習生と集合し、2階の会議室に向かった。はじめに担当してくださる学芸員の方と実習生3人の自己紹介が行なわれた。開催されている企画展「井上雅之 描くように造る」展について、初期作品から今回の展覧会の為に制作された作品の説明を受けた。その後、ワークシートを作成するために、企画展「井上雅之 描くように造る」展と「新収蔵品展」を来館者の視点と学芸員の視点で作品を鑑賞した。その際、来館者の視点で鑑賞できるようにと来館者が使う入口から美術館内へ入った。井上雅之氏の実物の作品の前で見ると見やすい箇所やキャプションの説明を受けた。組み立てた部分を接続させるボルトを作品と同じ繰り返しで覆い隠すことで鑑賞の妨げにならないようにしていたり、大型作品は1日かけて組み立て、1週間かけて会場を作り上げた事を知った。その後、1時間で2つの展覧会を鑑賞し、ワークシートを作成した。

午後は、午前中に制作したワークシートの内容を報告した。その後、収蔵庫を見学した。第1展示室で展示解説員による板谷波山と松井康生についてのギャラリートークを聞いた。14時30分に小野寺玄のポジフィルムの整理を行なった。ポジをスキャンし、ポジに書かれた文字、数字を打込み、エクセルでまとめた。16時30分から実習ノートを作成し、1日目の実習を終えた。

第2日目 7月19日(火)

9時から「新収蔵品展」の会場の撤去作業を行なった。「第21回全国子ども陶芸展inかさま」の後に「新収蔵品展」に戻すためにメジャーと共に作品とキャプションの写真を撮影した。複数ある食器の作品については、メジャーを使って展示ケースと作品との間の距離を測った。その後、作品の撤去後と梱包作業を見学した。作者が陶磁器の作品の大きさに合わせ郵送としても使われた段ボールを作品の収納に使う際は、その箱の周辺を気泡緩衝材で梱包することで、段ボールに付着しているものによって収蔵庫内の他作品に影響を与えないようにしていることを知った。他にも、板谷波山の作品を見ながら学芸員の方による説明を聞いた。免震構造の展示ケースを見たり、転倒防止の釘の設置の仕方を日本通運の方が実際に作業しているところを見学した。テグスが作品に接触する部分にはチューブを付けることを教わった。

13時から、会議室で副館長による美術館についての説明を受けた。その後、県民ギャラリーで「第21回全国子ども陶芸展inかさま」に応募された作品の有無、破損の確認と写真と照らし合わせて正面に直す作業を行なった。15時30分から浅野暢晴のアートプロジェクトである「旅するトリックスター」の親子の彫刻作品を使って、井上雅之氏の作品と一緒に、美術館のtwitterに投稿するための写真を撮影した。16時45分に2日目の実習を終えた。

第3日目 7月20日(水)

9時から「第21回全国子ども陶芸展inかさま」で受賞した作品が入った段ボールを日本通運の方々から受け取り、バックヤードから展示室に運び、賞の種類ずつに分けて段ボールの紐をほどいた。10時から収蔵庫で作品点検の見学をした。重量のある大きな作品を点検、梱包する際は、2人で扱っていた。梱包を外す際に梱包に使われたテープは、体に貼るか、マットに貼るか、梱包されていたものに貼ることで、テープが作品についてしまっ

たり、他の作業に影響を与えないようにしたりしていることを教わった。また、作品を梱包していた薄葉紙に破損した部品が落ちていたを確認することを教わった。その後、桐箱の紐の結び方と段ボールを運ぶ際の紐の結び方を学んだ。11時から第1展示室に戻り「第21回全国子ども陶芸展inかさま」に出品される作品を段ボールから取り出し、梱包を外し、破損の有無の確認と出品リストと照らし合わせ、展示する順に作品を並べ、作品の向きを写真と照らし合わせ作品を展示ケースに並べてくれる日本通運の方に伝える作業を行なった。

13時から笠間焼について学んだ。実際の縄文土器やアクセサリ、すり鉢などの破片を見せて頂き、土器、陶器、磁器の違いを理解した。14時から、笠間芸術の森公園内にある茨城県陶芸大学校を見学した。笠間焼の歴史を学び、卒業制作や実際に轆轤を使って制作している様子や、窯を見学した。15時から博物館における茨城県陶芸美術館の位置と学芸員、美術館について教えて頂いた。その後、夏休みに美術館で行なわれるスタンプラリーの景品のくじをホチキスで止める作業を行なった。16時30分から実習ノートを制作し、3日目の実習を終えた。

第4日目 7月22日(金)

9時から小野寺玄のポジの整理を式典後すぐに作業を開始出来るように準備し、スキャンできるか確認した。9時30分から開会式に参加する受賞者とその保護者の方を会場内の席に案内した。10時から「第21回全国子ども陶芸展inかさま」の開会式を見学した。11時から「第21回全国子ども陶芸展inかさま」の第1展示室と2階県民ギャラリーを見学した。11時30分から小野寺玄のポジの整理を行なった。

午後、引き続き小野寺玄のポジの整理を行なった。その後、小野寺玄のポジの整理を引き継いだ人の為に整理する方法がわかるように簡易的なマニュアルを制作した。15時30分から9月から始まる「笠間焼250年記念 欲しいが見つかるうつわ展Ⅱー笠間と益子」展のポスター、チラシ、招待券の封筒のデザインが出来るまでの説明を受けた。16時から収蔵庫で「笠間焼250年記念 欲しいが見つかるうつわ展Ⅱー笠間と益子」に出品される器の高さ、幅、奥行をL字型の定規で測った。17時に閉館作業を見学した後、17時15分に4日目の実習を終えた。

第5日目 7月30日(土)

8時50分に警備員室前に他の実習生と集合、事務所向かい、挨拶をしてから、2階の会議室に向かった。会議室で今日のスケジュールを確認して、ワークショップの会場である9時に多目的ホールに向かった。陶芸作家の井上雅之さんとワークショップの担当の学芸員の方々に挨拶をした。その後、ブルーガンを使う為、手を冷やすためにバケツを借りに行き、水を汲みに行った。9時30分からワークショップに参加する方々に会場入口で消毒してもらい、席へと案内した。10時から「井上雅之 描くように造る」展のワークショップが始まり、午前の部は実習生も参加した。はじめに質感の違う2種類の紙をホチキスやハサミ、手、カッター、テープを使って切ったり、接着したりと加工した。その後、段ボールや巻き段ボールなど様々な材料を使って手、ハサミ以外にブルーガンを使ってマケットを制作した。11時に井上雅之さんが参加者全員の作品についてコメントをくださり、他の人の作品を鑑賞した。再度マケットの制作をした。12時に午前の部のワークショップが終了した。その後、午後の部の準備を行なった。

13時30分から午後の部の参加者が会場に入る前に消毒してもらい、席へ案内した。14時から午後の部のワークショップが始まり、ワークショップの補助を行なった。紙を配ったり、見回ったり、ゴミを集めたり、道具を片づけた。16時に午後の部のワークショップが終了した後、多目的ホールを元に戻す作業を行なった。16時30分に会議室に戻り、実習ノートを作成した。17時に最終日の実習を終えた。

横浜市歴史博物館

美学美術史学科 4年

第1日目 7月31日(日)

午前9時15分に博物館内の研修室に集合した。まず、オリエンテーションにて、実習メンバーの自己紹介と実習内容の概要について説明が行なわれた。その後館内を見学し、横浜市歴史博物館のテーマである「横浜に生きた人々の生活の歴史」を3万年にわたる市域中心に学ぶことができる常設展示を確認することができた。ターゲットを小学6年生に設定し時計回りに順路を問わず鑑賞することのできる、他にない円形展示施設の構図が印象に残った。資料の保存、保管の注意点の説明では、温湿度の調整として、温度20℃、湿度55%を24時間継続して管理することが求められており、光や明るさの調整や虫を館内に入れない設備を整えている点から、学芸員だけでなく多くの関係者の方が博物館運営に携わっていることを学ぶことができた。次に、学芸員の業務内容や庶務業務について説明して頂き、昼休みを挟んだ後、広報業務や最近の博物館・文化財行政について学ぶことができた。常設展・企画展の自由見学後には、館外ツアーにて博物館に隣接する大塚・歳勝土遺跡公園の見学を行なった。その後、最終日のテーマ課題について確認を行ない、1日目の実習が終了した。

第2日目 8月14日(日)

午前8時45分に博物館内の研修室に集合した。午前は民俗資料の取り扱い、保存方法について学ぶことができた。取り扱った資料は郷土資料で、実際に資料をカメラで撮影し、データをExcelに入力する作業を体験することができ、学芸員として求められる資料や歴史への専門性と、細かな点まで妥協をせず、資料保存に尽力されている活動を学んだ。昼休みの時間には館内の入り口付近で紙芝居の公演があり、実際に参加することができた。子供たちとご家族と一緒に楽しめるような内容、演出構成になっており、館内で開放的な環境を感じることができた。午後からは、大山家の古文書を整理させて頂き、江戸時代から明治期までの資料を新しい封筒に入れ替える作業を行なった。歴史的資料を実際に手に取り記録を残す作業を通して、何十年、何百年と作品を守り伝えていくための努力に加えて、地道な細かい作業が学芸員に求められていることを感じる事ができた。そして、自分が手に触れた資料が制作された情景や思いを考えながら大切に守り伝えていくことのできるような知識や経験を身に付けたいと思った。

第3日目 8月28日(日)

午前8時45分に博物館内の研修室に集合した。午前は彫刻作品のクリーニング・調書取りについて学ぶことができた。彫刻作品の部材(頭、胴体、脚部、手、足といった木像の部材)ごとに刷毛を使用してほこりや木くず等を払い手入れを行なった後に、法量計測のための木像の仮組みをメンバー全員で取り組んだ。これらの作業を1人で行なうこともあるというお話を伺い、作品をより良い状態で保存するために、作品に対する知識や現場での経験、計画性に加えて体力も必要な作業だと感じた。また、像高や座高、面長を測る際に木像を組み立てることや、計測を行なうにあたり人手が必要だということが分かり、自分が専門にしている分野だけでなく、幅広い知識、情報を得られるような活動をしたかった。昼休みを挟み、午後からは、考古資料(土器)の整

理、写真撮影の実習を行なった。土器に発見した地域の情報を白色のポスターカラーで書き込み、土器の紛失を防ぐための記録実習を行なうことができた。撮影では、スタジオで一眼レフカメラを使用して作品を撮影し、図録に掲載するまでの体験をすることができた。1つの作品を記録し、展覧会等で展示を行なうまで、多くの専門家の方々が携わっていることを感じる事ができ、どの現場、作品でも的確な作業ができるよう意識して行動したいと思った。

第4日目 9月11日(日)

午前8時45分に博物館内の研修室に集合した。午前は月に数回実施されている勾玉作りのワークショップ体験を行なった。勾玉体験では、初めて作業を行なう方も子供たちでも簡単にできるような説明やサポートを行なわれていることが分かり、ワークショップを実施してより多くの来館者に喜んで頂ける企画・準備の大切さを学ぶことができた。また、実際に自分が体験し、勾玉の完成形を考えながらヤスリで形を整える部分や、紐を通すための穴を開ける点など難しいと思っている工程で分かりやすいアドバイスを頂くことが多く、参加者の進捗を確認しながらワークショップの進行を務め、サポートを行なう上でも幅広く現場を見渡しコミュニケーションを取り合うことの重要性を感じることができた。昼休みを挟み、午後からは、午前の体験を踏まえ、次回行なうワークショップの進行計画をメンバーとともに考えた。自分たちが苦戦した部分や、説明を受けて良かった部分を参考に、時間を考慮しながら計画を立てる作業を経験することができ、当日の流れをよく確認して来館者が楽しく勾玉作りを体験し、喜んで頂けるような説明・サポートを行ないたいと思った。

第5日目 9月18日(日)

午前8時45分に博物館の外にある大塚・歳勝土遺跡公園の「れきし工房」に集合し、午前、午後ともに勾玉作りのワークショップを実習生が運営側となり開催した。事前準備を早めに取り組み、場を整えたことで来館者へのご案内をスムーズに行なうことができ、予定通りにワークショップを始めることができた。当日はホワイトボードでの説明書きを担当し、ワークショップでの目的を伝えることや、子どもたちや参加者に喜んでもらえる仕上がりを目指して制作することができた。作業が始まり、子どもたちが真剣に勾玉作りに取り組む姿に驚きながらも、分からないことや困ったことがあった子へ、事前に勾玉の作り方や工程ごとに苦戦した部分を踏まえてアドバイスをすることができた。昼休みを挟み、午後になると、午前の体験で感じたことを活かして子どもたちへの教え方を工夫することができ、より良い勾玉を作れるようになったと喜んでいる参加者の姿を見て、ワークショップを企画、運営する楽しさや奥深さを感じることができた。

第6日目 10月9日(日)

午前8時45分に博物館内の研修室に集合した。午前は企画展「追憶のサムライ横浜・中世武士のイメージとリアル」を見学した。担当学芸員の方から展示作品の解説に加えて、実際に企画から実行までにかかる時間、やるべきことの多さ、やりがいについて学ぶことができた。展覧会の第1部から第3部までのコンセプトごとに、当時の武士がどのようなイメージで捉えられ、現代まで語り継がれてきたのかを感じることができ、展覧会の企画をする上で、作品を通して何を伝えたいのかを明確にし、作品調査、歴史の調査、所蔵先の方と話し合いをすることの大切さを学んだ。昼休みを挟み、午後からは最終課題「ワークショップ開催案」の発表を行なった。各学部・学科の特徴を活かした内容が印象に残っており、横浜市歴史博物館だからこそできるワークショップ案を考えることができた。最後に実習担当の方からコメントを頂き、全日程の実習が終了した。

博物館実習報告

埼玉県立近代美術館

美学美術史学科4年

第1日目 7月19日 (火)

9時55分までに2階の講堂に集合、副館長により開講式が行われた。次に、管理担当の方と館内を見学した。企画展の室温はやや肌寒く、24時間体制で温度調整がされている。また、火災の際には作品に優しいハロン消火設備が設置されていた。作品を管理する上で、美術館の設備ではどのような対策をされているのかを理解する必要性を学んだ。次に、学芸主幹の方による学芸部の仕事についての講義を聞いた。作品収集や保存管理と様々な業務がある学芸員に必要なことは、国内外を問わずあらゆる美術館を見て考えることだというお話が印象深かった。次は教育主幹の方による管理の仕事についての講義だった。企画展などを開催する際に予算は重要であり、展示作品以外にも様々なことに配慮することが大事であると学んだ。続いて、学芸員の方から企画展についての講義を受けた。コロナ禍による予算削減からどのように来館者が楽しめる展示会にし、その美術館ならではの独自性を出せるのかを考えながら企画されていることを知った。

第2日目 7月20日 (水)

最初に図書館司書の方から、図録や美術資料などの検索の仕方を教えていただき、今後の卒業論文の文献探しに活用したいと思った。現在、美術館には多くの資料がある中で収納する場所が少なく、また整理するための人手が足りないことの問題点を知った。実際に、資料研究室に行って本の整理を体験したが、体力を必要とし大変さを実感した。次に、学芸員の方から美術資料の収集と保存、常設展について学んだ。作品を収集する中で、作品の選定や調査など想像以上にプロセスがあった。また、油彩画の取り扱いという講義で実際に作品の収蔵庫に入ることができた。室内の温度は肌寒く、出入りのドアは二重になっているなど作品の保存環境が細かく設備されていた。常設展の説明ではテーマを立て、担当の学芸員を入れ替えるなど、展示内容がマンネリ化しないような工夫がされていることを学んだ。また、可動壁を利用して同じ室内でも空間を変えるようにしているとのことであった。

第3日目 7月21日 (木)

今日は、午前から彫刻の清掃があった。年に3回清掃し、彫刻についた汚れをとりワックスがけをしてメンテナンスを行なっていることを学んだ。今回は、グループに分かれて彫刻3体を水拭きしたりした。彫刻に苔が生えたり鳥の糞がついてしまったりと、屋外の作品は管理が難しいと感じた。午後は、広報担当の方から美術館の広報活動などについて学んだ。こちらの美術館は、テレビCMなどのいわゆるペイドメディアは行っていないとのことである。そのため、埼玉県の番組や新聞記事などに載るための積極的な発信をしていることが分かった。次に、教育普及活動についての講義を受け、自分たちで作品を鑑賞して意見を共有する体験をした。実際に作品と触れ合うこと、また自分の考えを共有することで新しい発見が多くでき、良い学びであった。最後に、視覚障害者のガイドについて学んだ。美術館を利用する人のスタンスは様々であり、誰もが美術館を楽しめる工夫がされている必要があると感じた。特に、触図という図中の点や線、面を盛り上げ、触ることで作品を感じることができるものを初めて知

り、興味深かった。

第4日目 7月22日 (金)

今日で合同実習が最終日、最初に学芸員の方の講義があった。学芸員になるために必要なことや、ご自身が働く美術館の魅力も聞くことができた。次に、日本画や版画、写真の取り扱いについて学んだ。この美術館では、作品を収蔵するために温度を20℃前後、湿度を50%前後に設定している。日本画では、実際に掛け軸を展示する方法を学び、また版画や写真の収蔵方法についてラック収納やマット装という方法があることを知った。マット装では、台紙に作品を置きそこにアクリル板をつけることで作品を保護し、その上にもまたマット台紙を置いて上に積み形で作品を保存できる。非常に収納の効率は良く、日本画以外に版画や写真についての収納方法を学ぶことができて良かった。最後は、館長の方からコロナ禍における今後の美術館について貴重なお話を聞くことができた。合同実習では初見の人が多かったが、同じ志を持つ仲間としてお互いに協力することができた。

第5日目 8月9日 (火)

今日から個別実習が始まった。10時に、担当学芸員の方と企画展の会場に移動し、展示室の照明や温湿度を確認する作業になった。次に、収蔵庫で所蔵されている作品数をリストと照らし合わせながら確認していく作業をした。作品を実際に触ることで緊張感があり、声の掛け合いをしていく中で仲間と協力することの大切さを感じた。午後は、図録の訂正部分をテープで貼ったり、アンケートの集計をする作業をした。今回事務的な作業をする中で、集中力と緊張感を同時に保つことの大変さを実感した。例えば図録の訂正作業だと、常に誰かの手にわたる物として、緊張感を継続させなければならない。今日を通して、学芸員は日々責任感を持って業務を遂行していると学んだ。

第6日目 8月16日 (火)

今回は、先週と同様に午前は収蔵庫での作業、午後はパソコンでの事務作業をした。収蔵庫は温湿度の急激な変化を防ぐ木材が使用されている。また、収蔵庫で写真の作品を点検する際に油絵の作品よりも棚での収納が多いように感じた。これは、写真は油絵よりも外気に弱く、写真だからこそマット装で重ねて棚に収納できるという利便性があることを学んだ。作品の特徴に合わせて、収納も工夫されている。午後、事務作業が終わった後に現在開催されている企画展示室のレイアウトを実際に見ることができた。可動壁を利用して来館者のための通路を作ったり、また空間に変化をつけたりと様々な工夫がされていることがレイアウトから読み取れた。学芸員は作品の知識だけではなく、芸術を発信する美術館という場所を最大限に活用するための手段も学ぶことが必要であると感じた。

第7日目 8月23日 (火)

午前は、前回と同様に収蔵庫で作品(主に版画)の点検を行なった。版画は油絵と異なり、絵具の凹凸がないことから重ねて収納できる。しかし、重ねる際に作品の表面が傷つかないように薄葉紙で保護されている。午後は、担当の方と郵便局に行った後に収蔵庫で油絵の点検を行なった。収納されている作品と貼られているタグが合っているかなどの確認作業をした。その際、収蔵庫には「環境調査中」と書かれた虫取りが設置されていた。このような外部から侵入した虫を防ぎ、収蔵庫を清潔に保つための調査は年に2回ほど行なわれている。最後に、日誌を書いて担当の方に提出し実習は終わった。7日間の実習では、収蔵庫での作業など普段ではできない貴重な経験を多くさせていただいた。今後、作品鑑賞だけではなく保存管理といった美術館の運営にも注目しながら、取り組んでいきたい。

千葉市美術館

美学美術史学科4年

第1日目 9月7日(水)

10時より、ワークショップルームにて、館長の挨拶、実習概要、注意事項、そして実習生の自己紹介を行なった。実習中は、15名ほどの実習生をAグループとBグループという2つのグループに分けて別行動をすることだった。Aグループだった私は、1日目は施設見学を行なった。この間、Bグループは、9月14日(水)より開催される「新版画展」の額入れ作業を行ない、Aグループは2日目に額入れ作業を行なう。施設見学は、学芸員の方の説明を受けながら、美術館の中を見学した。ビル型的美術館であることの難しさ、また、2020年にリニューアルオープンをして、何がどう変化したのかなど、施設を見学しながら発見するものが多かった。普段立ち入ることのできない警備室や管理室、収蔵庫なども見学させていただいた。また、階の移動の際には、普段来館者が利用しているエレベーターではなく、荷物用の3トンまで運ぶことのできるエレベーターで移動した経験も普段なかなかできないものだと感じた。

第2日目 9月8日(木)

10時から11時の間は、ワークショップルームにて「美術館における保存」という館長による講義を全体で受けた。実際に震災の際に文化財レスキュー事業に関わり、レスキューを行なった館長のお話から、地震など災害の多い日本で美術品を守る難しさや、災害によって救出の仕方が異なるということなどを学んだ。11時10分から12時30分の間は、収蔵庫にて「新版画展」の額入れ作業を行なった。お昼休憩を挟み、午後も「新版画展」の額入れ作業の続きを行なった。額入れ作業を行なった後は、7、8階の展示室に移動し、「新版画展」のために展示室の壁を移動させる作業を行なった。昨日まで行われていた展覧会の部屋の構造のままになっていたため、「新版画展」のために移動壁を動かした。壁を動かすにはかなり力があるため、軍手が配られ、2人から3人で1つの壁を動かすような形であった。このように、壁を動かすことで、展覧会ごとに部屋の構造を変えられるのは、来館者の方にとっては、毎回新鮮な気持ちで美術館を訪れることができると感じた。

第3日目 9月9日(金)

午前中は、7、8階の展示室にて「新版画展」の展示作業を行なった。日本通運さんが来て、先日額入れ作業を行なった作品を展示室に運び、箱から出して定位置に置いていくという作業だった。展示室の壁に作品の図版と番号が振られており、そこに作品を図面通り置いていく作業だったが、その中でもやはり作品を丁寧に扱うことは常に心がけていた。日通で美術品配属の方のお話も直接伺うことができ、展示作業を行う上で大変なことや良いことなど伺うことができた。また、印刷されたキャプションを、専用の板に挟んでいく作業も行なった。作品名や作者などが記載されているキャプションだけではなく、見どころが記載されたキャプションも同様に板に入れていった。午後は、収蔵庫にて、掛け軸の箱の紐の扱いを学んだ。大学の実習において学んだことだったため、その経験を活かし、スムーズかつ丁寧に扱うことができた。

第4日目 9月12日(月)

午前中は、展示室にて「新版画展」の照明設置作業の見学を行なった。サムサラという照明設置を担当している会社の社長の方のお話を直接伺いながら、照明設置の際の工夫や、その仕組みを学んだ。午後は、ワークショップルームにて「教育普及について」「広報について」の講義を受けた。まず、教育普及の講義では、リニューアルオープン以降に更なる力を入れた千葉市美術館による教育普及の在り方や、どのようなプログラムを行なっているかなどの講義を受けた。その後、実際に行なっている教育普及プログラムを体験した。内容としては、日本画・油彩画キットを触って体験してみるというものだった。子供達が、キットを触って「これは何に使うのだろうか？」などと考え、理解した後、実際に常設展を見学して作品を見てキット内の道具と結びつけるという趣旨のものだった。実際に、私たち実習生も知らない道具がある中で、最後に作品を見て結びつけることができるのは、今後作品の見方がガラリと変わると感じた。広報の講義では、広報をする上でどのようにアンケートを取り、分析しているか、どの媒体を活用してどのような効果があるかなどを学んだ。また、実際にこれから行われる展覧会のポスター候補案をいくつか見せていただき、どのポスターのどの箇所が良いかなど話し合った。

第5日目 9月13日(火)

午前中はワークショップルームにて、3つの講義を受けた。まずは、「展覧会ができるまで(近世)」と題し、企画立案や開催形態、展覧会の準備などの観点から、どのように近世の展覧会ができるのかを学んだ。次に、「展覧会ができるまで(現代)」の講義を受けた。先ほどの近世の講義とは異なり、現代美術・現代アートとは何か、美術館という場所とは何かなどの観点から、現代美術について考えさせられる講義であった。最後に、「美術館を巡る今日の課題」という講義を受け、制度や組織、研究や収集などの観点から、美術館の課題を学んだ。13時30分から14時50分の間は、収蔵庫にて、罫の扱いを学んだ。罫の扱いについても大学の実習の授業で学んだ通りであったため、スムーズに扱うことができた。15時から16時の間は、次の日から開催される「新版画展」の記者レクチャーを見学した。展示室の前でメディアの方に対し、プレスリリースの発表を行なっている場面を見学させていただいた。展示の見どころや、作品紹介を行なった後に、展示を実際に見ていただくというものだったが、初めてプレスリリースの場面を見学させていただいたため、雑誌などのメディアに掲載されている展覧会の情報はこのようなプレスリリースの場から繋がっているのだと理解した。

第6日目 9月14日(水)

最終日は、「新版画展」の教育普及プログラムと、広報をそれぞれ考え、発表するというものだった。教育普及は、ワークショップと学芸員のギャラリートーク、講義を全て混ぜたものを考えた。先日の「広報について」の講義を受けた際に、新版画展の来場者は40～50代の方が多いのではないかと予想が出ていたことから、40～50代をターゲットとしたプログラムを考えた。発表についてフィードバックをいただいた際に、ワークショップは、子供向けばかりのものを開催しているが、実際は40～60代の層に非常に需要があるとおっしゃっていた。また、先日の「教育普及について」の体験から、実際にワークショップを行なった後に展示を見て学ぶといった一連の流れを取り入れたいと考えた。このように、以前では考えられなかった、実習中に学び得た内容を最後の個人課題に取り入れることができた。他の実習生の発表を聞き、同じ展示であっても、様々な角度から作品や展示を鑑賞し、考えられていると大変勉強になった。

博物館実習報告

実践女子大学
香雪記念資料館

美学美術史学科 4年

第1日目 8月1日(月)

実習初日は、10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、香雪記念資料館の大まかな基本情報を学ぶことから始まった。香雪記念資料館の学芸員の主な仕事内容としては「収集・保管」「展示」「教育普及」「調査・研究」の4点が挙げられる。特に保管に関しては厳重で、作品を保管している収蔵庫の扉はごみや塵が入らないように二重になっており、また部屋に入る前にスリッパの裏の汚れをガムテープで取るなど、作品に対して様々な配慮を行なっていることを知った。昨年の実習の授業とは異なり、実際に学芸員の方の仕事場所を見ることができたので、より学芸員の仕事への理解が深まった。特に印象的だったのは、収蔵庫の消火方法である。火事が起きた際でも作品に水を撒くことは出来ないため、どこの美術館でも窒素を使った消火方法を行なうそうだ。美術館に行った際には消火方法まで気にすることはなかったため、今回学芸員側の目線になって学ぶことができた点が特に印象的であった。

午後は掛軸の展示方法を学んだ。去年実習の授業で学んだことを活かしてグループごとに展示を行なったが、今回はそれに加えて最終日の展示実習に向けて高さを調節する練習も行なった。実際に作品を展示する際には、自分たちで周りの作品と高さを合わせなくてはならないため、実際の展示方法について新たな知識を増やすことができた。

最後に展示室と収蔵庫の清掃を教わった。清掃は、ただ部屋を綺麗にする役割だけでなく、作品がきちんと問題なく収蔵されているかの確認作業も兼ねていることを学んだ。

第2日目 8月3日(水)

10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、午前中は額縁の取り扱いについて学んだ。額は今まで学んだ展示方法とは大きく異なり、裏面の紐にピクチャーワイヤーをかけて展示するため、展示方法だけでなく紐の結び方から学んだ。また、ピクチャーワイヤーを1本使用する場合と2本使用する場合で展示方法が異なるため、実際に展示を複数回行うことで理解を深めた。また、掛軸や巻子と違い、額を運ぶ際は2人で行わなければならないため、2人で作品を運ぶ練習も行なった。1人の時とは違った注意点を知ることができ、より取り扱いの理解が深まった。

午後はテグス張りの練習を行った。事前にテグス張りのメリットとテメリットを学び、その後茶碗を正方形のサイコロの上に置き、テグスにチューブを通すテグス張りの方法で練習を行なった。茶碗などの割れ物は、地震などで倒れてしまうと簡単に壊れてしまうため、テグスが緩まらないような様々な方法で強く結んでいた。鑑賞者として作品を見る際には気が付かないような工夫が為された上で展示されていることを実感することができた。

残りの時間はギャラリートークの為の勉強時間を頂き、自分が発表する作品の基礎知識や自分なりの紹介文を考えた。途中香雪記念資料館の宮崎法子先生が来て下さり、企画展示室にある作品の大変勉強になる解説を聞くことができた。

第3日目 8月4日(木)

10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、午前

中は巻子の取り扱いを学んだ。去年の実習授業で学んだ巻子の取り扱いについて改めて確認し、その後展示の際の注意点を教わった。展示の際、巻いているすき間の部分に入れる巻き芯は毎回作品の大きさに合わせて制作している。巻き芯の作り方には作品を傷つけない工夫が凝らされていて、改めて作品を取り扱う重大さを学ぶことができた。

午後はキャプションの説明と制作方法を学んだ。香雪記念資料館では、本物の作品には青色のキャプション、複製には白いキャプションと色分けを行なって鑑賞者に分かりやすいように区別されている。キャプションを置く位置や作品の大きさによって、角を削って影が出来ないようにしたり大きさを変えたりなど、至る所に学芸員の方々の工夫があることを理解した。制作は慣れれば短時間でできるものの、毎回展示する作品分キャプションを作るのは大変な作業になるので、展示作業は作品を展示する以外にもたくさんの仕事があるのだと実感することができた。

最後にギャラリートークの勉強時間を頂き、3日目が終了した。

第4日目 8月5日(金)

10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、午前中は博物館についての基礎知識を学び、その後学校から歩いて5分ほどの白根記念渋谷区郷土博物館に訪れた。博物館や美術館の目的の違いを、実際の博物館・美術館の展示方法を例に挙げながら比較することで、目的が違うからこそ展示方法や優先順位が異なるという事を学び、自分たちが展示を行う際に何を目的として展示するべきかを改めて考えることができた。博物館と美術館の違いは目的だけでなく、キャプションにも表れているようだ。導入の文章や年表・説明など事細かに説明されたキャプションは博物館特有のもので、作品を見ただけではその価値や歴史を理解できないため、あえて情報量の多いキャプションを用意するようだ。他にも、学芸員の先生が以前勤めていた先が郷土博物館だったため、その際の展示内容を教えて頂いたが、郷土博物館に行ったことがなかったので展示内容の身近さに驚いた。白根記念渋谷区郷土博物館では展示ケースや展示方法、キャプションの内容などを香雪記念資料館と比較し、共通点や独自の工夫などを学ぶことができた。

午後は、香雪記念資料館で実際にギャラリートークを行った。学生がそれぞれ3作品選ぶので同じ作品を紹介することもあったが、参考作品の画像や拡大写真を用意するなどそれぞれ違った観点からの紹介を行っていたのでそれぞれ違った良さを感じることができ大変勉強になった。

第5日目 8月10日(水)

10時30分にプレゼンテーションルームに集まり、その後すぐに香雪記念資料館の企画展示室へと移動した。はじめにウォールケースの説明を受け、実際にケースの中を歩かせてもらった。上を向くと壁にカーテンレールが付いており、そこにピクチャーワイヤーを付けることができた。また台車を3種類比較して、作品の大きさや形状で使い分けられることを学んだ。即席の展示台を作るときは斜台とサイコロを組み合わせており、実際に組み立ててみると想像以上の時間がかかり驚いた。

午後は4人と3人グループに分かれて実際に展示を行なった。掛軸2点・額・巻子という使用する作品の指示だけを受け、展示方法や順番などは今までに学んだ知識を活かして展示を行った。作品を扱う時間は一瞬で、主に掛軸や額の高さ調節や展示台の制作に時間を取られてしまった。今回は4作品のみの展示だったが午後の3時間丸ごと使ってやっと完成したので、1つの展示を完成させるには迅速な作業と多くの経験が必要なのだ実感した。最後に各班でこだわった点や展示の工夫を発表しお互いの良い点を伝え合って、たくさんの学びを得た5日間の展示実習が終了した。

梱包実習報告

学生が記録した実習ノートの一部を紹介します。

実習記録

8月2日(火) 天候 晴れ 涼	
実習場所 実践女子大学 渋谷キャンパス 1階プレゼンテーションルーム	
<p>①木製箱の梱包・開梱について</p> <p>内容 木製箱の梱包・開梱について</p> <p>①木製箱の梱包・開梱について</p> <p>②紙箱の梱包・開梱について</p> <p>③紙箱の梱包・開梱について</p> <p>④紙箱の梱包・開梱について</p>	<p>②紙箱の梱包・開梱について</p> <p>③紙箱の梱包・開梱について</p> <p>④紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑤紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑥紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑦紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑧紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑨紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑩紙箱の梱包・開梱について</p>
感想 梱包の重要性や梱包の仕方について、梱包は簡単だが、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。また、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。また、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。	

美学美術史学科3年 (R.S)

実習記録 梱包実習

8月2日(火) 天候 晴れ	
実習場所 実践女子大学 1階 プレゼンテーションルーム	
<p>内容 梱包実習: 仏像、陶器、絵画などの梱包について学ぶ</p> <p>①仏像の梱包</p> <p>②陶器の梱包</p> <p>③絵画の梱包</p>	<p>④仏像の梱包</p> <p>⑤陶器の梱包</p> <p>⑥絵画の梱包</p> <p>⑦仏像の梱包</p> <p>⑧陶器の梱包</p> <p>⑨絵画の梱包</p> <p>⑩仏像の梱包</p> <p>⑪陶器の梱包</p> <p>⑫絵画の梱包</p>
感想 今回の実習では、梱包作業が以前に比べて大変に気が重くなって行っていたというところがあった。特に海運船、船積み、さらには飛行機での梱包は、作品の特性や材質に合わせて細かく対応できることが重要だと感じた。梱包は単なる作業ではなく、実際に梱包することで、注意点を工夫してはいるが、梱包の重要性や梱包の仕方について、梱包は簡単だが、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。	

美学美術史学科3年 (H.T)

実習記録

8月2日(火) 天候 晴れ	
実習場所 実践女子大学 渋谷キャンパス 1F プレゼンテーションルーム	
<p>内容 ①木製箱の梱包・開梱について</p> <p>②紙箱の梱包・開梱について</p> <p>③紙箱の梱包・開梱について</p> <p>④紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑤紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑥紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑦紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑧紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑨紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑩紙箱の梱包・開梱について</p>	<p>⑪紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑫紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑬紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑭紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑮紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑯紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑰紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑱紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑲紙箱の梱包・開梱について</p> <p>⑳紙箱の梱包・開梱について</p>
感想 梱包の重要性や梱包の仕方について、梱包は簡単だが、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。また、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。また、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。	

美学美術史学科3年 (H.K)

実習記録

8月2日(火) 天候 晴れ	
実習場所 実践女子大学 1階 プレゼンテーションルーム	
<p>内容 ①仏像の梱包</p> <p>②陶器の梱包</p> <p>③絵画の梱包</p> <p>④仏像の梱包</p> <p>⑤陶器の梱包</p> <p>⑥絵画の梱包</p> <p>⑦仏像の梱包</p> <p>⑧陶器の梱包</p> <p>⑨絵画の梱包</p> <p>⑩仏像の梱包</p> <p>⑪陶器の梱包</p> <p>⑫絵画の梱包</p>	<p>⑬仏像の梱包</p> <p>⑭陶器の梱包</p> <p>⑮絵画の梱包</p> <p>⑯仏像の梱包</p> <p>⑰陶器の梱包</p> <p>⑱絵画の梱包</p> <p>⑲仏像の梱包</p> <p>⑳陶器の梱包</p> <p>㉑絵画の梱包</p> <p>㉒仏像の梱包</p> <p>㉓陶器の梱包</p> <p>㉔絵画の梱包</p> <p>㉕仏像の梱包</p> <p>㉖陶器の梱包</p> <p>㉗絵画の梱包</p>
感想 今回の実習では、梱包作業が以前に比べて大変に気が重くなって行っていたというところがあった。特に海運船、船積み、さらには飛行機での梱包は、作品の特性や材質に合わせて細かく対応できることが重要だと感じた。梱包は単なる作業ではなく、実際に梱包することで、注意点を工夫してはいるが、梱包の重要性や梱包の仕方について、梱包は簡単だが、梱包の仕方によって梱包の強度や見た目が異なることを学んだ。	

美学美術史学科3年 (A.O)

博物館学課程の受講について

1. 学芸員とは

博物館法によって定められている美術館や博物館、資料館などで働く専門の職員を学芸員といいます。学芸員は資料の収集、保管、展示などの様々な実務を行なうとともに、展覧会の企画や所蔵品の調査研究といった専門的な仕事を担っています。学芸員には、歴史や民俗、自然科学系博物館の学芸員や動物園の学芸員まで幅広い内容を含みますが、本学の博物館学課程では、美術館学芸員の仕事に関連する知識を学ぶように構成されています。

2. 資格取得に必要な科目・単位数

学芸員資格を取得するには必修科目19単位と選択必修科目12単位以上を修得しなければなりません。卒業に必要な単位数に含まれない科目を履修しなければなりませんので、受講にあたっては十分な計画と最後までやり遂げる熱意を持って臨んでください。

3. 受講にあたって留意して欲しいこと

- (1) 博物館学課程の受講は3年生から始まります。受講にあたっては2年生の後期にオリエンテーションを行ないます。履修要項をよく読んで臨んでください。
- (2) 受講が始まってからは皆さんの資格取得をサポートするために、「博物館実習1b」の中できめ細かい指導（個別も含め）を行なっています。授業の日時や呼び出しについては、随時掲示板で連絡しますので、掲示板はこまめにチェックしましょう。
- (3) 授業でも美術館・博物館への見学実習を行います。普段からも積極的に足を運ぶようにしましょう。

4. 博物館実習について

- (1) 4年生になると「博物館実習2」で実際に美術館・博物館での実習を行ないます。実習先は事前アンケートや皆さんの専攻分野を基に、各実習先の受入条件などを考慮して、博物館学課程で決定します。希望通りにならない場合もありますが、実習先の決定は課程に従ってください。
- (2) 3年生までに「博物館実習2」を除くすべて必修科目および選択必修科目を履修し、単位を修得していないと、4年生で博物館実習をするため「博物館実習2」を履修することが出来ません。しっかりと努力しましょう。
- (3) 博物館実習は、美術館・博物館の方々のご厚意によって受け入れていただいています。自分の行動に責任をもち、貴重な機会であることを心得たうえで、実習に参加してください。

受講の流れ



資格取得に必要な科目・単位数

	科目名	単位	年次
必修 (19単位)	博物館学入門	2	3
	博物館経営論	2	3
	博物館資料論	2	3
	博物館教育論	2	3
	生涯学習概論	2	3
	博物館情報・メディア論	2	3
	博物館展示論	2	3
	博物館資料保存論	2	3
	博物館実習1a	1	3
	博物館実習1b	1	3
	博物館実習2	1	4
選択必修 (12単位以上) ※	美術史概論 a	2	3
	美術史概論 b	2	3
	工芸史概論 a	2	3
	工芸史概論 b	2	3
	文化史概論 a	2	3
文化史概論 b	2	3	
選択	知的財産研究	2	3～
	アート&パブリッシング	2	3～
	パブリック・プログラム研究	2	3～
	保存修復 a	2	3～
保存修復 b	2	3～	

※詳しくは履修要項を確認してください。

MUSEOLOGY

MUSEOLOGY No.42

発行日 2023年3月18日
発行者 実践女子大学 博物館学課程
〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49
TEL 03-6450-6899 FAX 03-6450-6812
編集 桑 和沙(文学部美学美術史学科 助教)
印刷所 日野台印刷株式会社

